

社会科授業案：教科で育みたい人間像
「社会に参画し創り続ける人」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-03-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 望月, 慈希 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/00029489

社会科授業案

教科で育みたい人間像 「社会に参画し創り続ける人」

授業者 望 月 慈 希

- 1 日時 令和4年10月14日（金） 第2時 11：30～12：20
- 2 学級 1年A組（1年A組教室）
- 3 題材名 武士が権力を握ることができた決め手とは—この時代における権力とは何か—

4 本題材で願う学び

「武士が権力を握ることができた決め手とは」を追求する活動を通して、平安時代から鎌倉時代にかけての政治、土地制度などの移り変わりをとらえながら、他者とかがかわる中で事象同士を比較したり、様々な視点から考察したりすることによって、古代から中世へと社会がどのように変化していったのか理解できる。その上で問いについて語り合い、「この時代における権力とは何か」について自分なりの考えを構築できる。

（学習指導要領との関連：(1)古代までの日本 ア(ウ)、(2)中世の日本 ア(ア)(イ)）

5 題材観

(1) これまでの子どもの学び

子どもたちと共に以下のことを大切にしながら学んできた。

一つめは、自分なりの考えをもつことができる問いを共有することである。私たちは、社会的事象を知識として習得するだけでなく、習得した知識を活用し、思考や表現する姿に価値を置いている。古代国家の成立についての学習では「文明とは何か」という問いを共有し、世界の古代文明を調査しそれぞれの特色を見だし、比較することで様々な視点から問いについて考え、自分なりの答えを見いだす姿があった。しかし、自分なりに考える基盤には資料、事実などの根拠に基づいて考えることが大切である。常に子どもの自由な考えを大切にしながらも、その考えには明確な根拠や資料による裏付けがあるのかを問い直しながら、共に学習を進めてきた。

二つめは、多面的・多角的に学ぶということである。多様な他者とかがかわることで、自分では気づくことができなかった視点からとらえたり、異なる立場に立って考えたりしながら、判断し結論を導こうとしてきた。縄文時代と弥生時代の学習では「縄文、弥生時代には文明があったといえるのか」をテーマに学習を進めた。ある子どもは、弥生時代は同時期にあった世界の文明と比べ、文化や技術的に劣っているため、縄文時代は文明ではないと考えた。しかし、縄文から弥生への技術の進歩や集団の拡大に着目した弥生時代に文明があったといえるという他の仲間の意見を聞き、世界における他の文明との比較に留まらず、日本における異なる時代同士を比較する視点を導くことができた。このように、追求する過程で対立や解釈のズレが生じたときには、考えの根拠や価値観について語り合い、相手の

見方や考え方に対する理解を深めながらよりよい結論にたどり着こうとしてきた。

三つめは、他者意識をもって学ぶために協働する場面を設定することである。自分の意見を確立することだけに留まらず、相手に自分の考えを説明したり、伝えたりする場を設定し学習してきた。「古墳時代には文明があったといえることを納得させよう」では、提示された資料を根拠に班ごとに話し合いをし、意見を深めながらホワイトボードを用いプレゼンを行うためのまとめを制作した。どのようにすれば聞き手を納得させることができるかを考えながら、自分の考えをよりわかりやすく相手に伝えようとするようすが見られた。子どもたち同士の語り合いや表現し合う活動を通して他者の考えにふれ、より深い自分の考えをもつことができるように心がけている。

中学校の社会科に初めて出会った子どもたちは、これらの学びを積み重ねることで社会科を学ぶ醍醐味を味わい始めている。一つの事象や要素を学ぶことで、自分の考えを深めたり、関連する他の事象へ興味をもち、自分と異なる考えをもつ仲間との交流を求めてかわり合ったりする姿が多く見られている。このような学びを重ねることで、その時代の社会のあり方を思い描けるようになってほしいと願っている。

(2) 本題材の価値

本題材はこれらの学びを生かして、時代の移り変わりや時代の変化について子どもたち自身の力で追求していくことができる題材である。

①多面的・多角的に時代の移り変わりとらえる

鎌倉時代は過去の政治、土地制度など社会が大きく変化した転換期だったと考える。本題材では「権力」

を切り口にして、社会の変化に迫っていく。平安時代から鎌倉時代への変化は多岐に渡っており、複雑でとらえづらい。この社会の変化を総括してあらわす言葉として「権力」という言葉を子どもたちと共有する。「権力」は当時の社会のあり方を説明する上で欠かせないものであり、簡単に説明できない言葉である。だからこその言葉を説明する子どもの姿は、自分なりにその時代の社会のあり方や変化を理解し、自らの考えを構築していることをあらわしているにとらえている。子どもたちは、題材の始まりでは「権力」について明確には説明できないだろう。しかし、問いを追求し、多面的・多角的に時代の移り変わりをとらえ、理解を深めることで「権力観」が子どもたちの中に構築されるだろう。子どもたちはこのように「権力観」を構築していくためには次のような歴史的な事象や時代の移り変わりを理解することが必要である。政治では奈良、平安時代で確立された律令制度が崩れ、中央から権力を与えられ地方を支配した国司、郡司は力を失っていった。鎌倉時代に入ると鎌倉幕府から派遣された守護と地頭が地方の支配へ関与するようになり、朝廷、幕府の公武二元政治が始まった。土地制度については、奈良時代には天皇が全ての人民、土地を支配する公地公民を行い中央集権国家が成立した。しかし、平安時代になると貴族による荘園開発が進み公地公民が崩れ、力をつけた貴族たちによる政治が始まり、藤原摂関家による摂関政治の時代を迎える。しかし、地方の政治の混乱を招き藤原純友の乱を始めとする様々な反乱が起り、貴族がもたない武力をもつ存在として武士が重用されるようになる。貴族、天皇の権力を巡る争いの中、保元・平治の乱において平氏が力を持ち、頭領である平清盛は太政大臣となり貴族化した平氏が力をもつようになった。その後の、源平合戦を経て源頼朝が征夷大将軍となり本格的な武家政権が成立する。そして、承久の乱において朝廷勢力を倒すことで武家政権は安定期を迎えることになった。このように見ていくと平安時代から鎌倉時代では社会全体の姿が大きく変化したことがわかる。このような大きな変化をとらえることが必要であると同時に、この大きな変化がこの題材のおもしろさだと考える。この変化をとらえるためには、一つの視点や立場から社会を見るのはもちろんのこと、様々な視点や立場を統合し、多面的・多角的に考えることが必要不可欠である。子どもたちはこの題材を通して、物事を多面的・多角的にとらえる力や見方や考え方を育んでいこう。

②時代の変化を大観することで学びを深める（ダイナミックな学び）

歴史学習では、一つの時代や歴史的な事象を取り扱い

学習していくことが多い。このような学び方はその時代の知識、理解を深めることには有効な学び方である。しかし、一方で単なる知識の習得になってしまうことが多い。そこで本題材では複数の時代にまたがって学習していく。時代と時代を比較することで、子どもたちは一つの時代を学ぶだけでは気づけない社会を構成する要素を見だし、その上でそれぞれの時代への理解をより深めていこう。その際、前述したような時代ごとの政治や土地制度などを比較する必要のある問いを共有し、時代の変化を追求する中で、子どもたちが時代を越えた共通する要素や異なる要素を見出すことに期待したい。

(3) 本題材で願う子どもの姿

本題材で願う子どもの姿は大きく2つある。

一つめは「他者とかがかわる中で事象同士を比較したり、様々な視点から考察したりすることによって、古代から中世へと社会がどのように変化していったのか理解する姿」である。平安時代はどのような時代かと問うと多くの子どもは貴族の時代だと答えるだろう。同じように鎌倉時代はどのような時代かと問うと武士の時代だと答えるだろう。この答えは正しいが、それぞれの時代の一面的な特徴しかとらえていないと言える。「なぜ貴族の力は衰えたのか」「武士はどのようにして権力を握ったのか」などの平安時代から鎌倉時代のつながりや変化に関する問いに答えることは難しいだろう。平安時代、鎌倉時代それぞれの特徴は理解できていても時代と時代をつなぐ要素や動き、変化は理解できていないからだ。平安時代から鎌倉時代は政治や土地制度など、多くの点で大きな変化があった時代であり、その変化は非常に複雑である。しかし、時代を越えて事象同士を比較したり、他者とかがわり様々な視点から考察したりすることによって、その変化を知り新たな社会が構築されるようすに思いを巡らせることができたとき、子どもたちは平安時代と鎌倉時代のつながりを見いだすだろう。そして、歴史は時代を越えてつながっていることに気づき、歴史を学ぶことのおもしろさを感じることができよう。政治、土地制度などの移り変わりについて理解を深めた上で、それぞれの要素を結び付け、点でとらえるのではなく線をとらえ、統合して古代から中世への社会の変化を大観することを願っている。

二つめは「『この時代における権力とは何か』について自分なりの考えを構築する姿」である。子どもたちは様々な資料や調査を基に「武士が権力を握ることができた決め手とは」を考察し、語り合うことで平安時代から鎌倉時代への社会の変化について理解を深めて

社会科授業案

いくだろう。その上で「この時代における権力とは何か」を問い返したい。子どもたちは思い思いに「武力」「土地の支配」「支配の仕組み」「朝廷の権力を抑える力」などの多様な考えをもつことだろう。時代を越えて学んでいた子どもたちは、この問いによって二つの時代で共通する要素や異なる要素を見いだしていき、当時の権力のあり方の本質を見いだすだろう。そして、意

見をぶつけ合うことで自分の考えを問い直したり、自分と異なる意見を受け入れたりしながら考えを深めることのおもしろさを味わっていくだろう。

この題材を学ぶ中で、この時点で社会がどのような要素から成り立っているのかを学び、子どもたちなりの社会像を見いだすことを私たちは願っている。

6 題材構想（全6時間）

- (1) 承久の乱～あなたなら朝廷側、幕府側のどちらに味方するか～（1時間）
- (2) 武士が権力を握ることができた決め手とは（4時間）
- (3) この時代における権力とは何か（1時間）

7 題材構想にあたって

本題材で願う子どもの姿を生み出すためには導入が大切だ。子どもに興味・関心・疑問を生み出すような題材との出会いを工夫したい。そこでまず「(1) 承久の乱～あなたなら朝廷側、幕府側のどちらに味方するか～」では承久の乱を扱いたい。承久の乱は力を失いつつあった朝廷が復権を狙い、鎌倉幕府へと争いを仕掛ける場面であり、旧体制と新体制が争うという構図は子どもたちにとって興味を引くものだろう。授業者は承久の乱の発端を説明し、朝廷側、幕府側がそれぞれ全国の武士に味方につくように促した文章を提示し、「あなたなら朝廷側、幕府側のどちらに味方するか」を問う。子どもたちは、文章や自分の知識を基に話し合っていくだろう。子どもたちは、幕府側の武力や朝廷の弱体化などに着目し「武士の方が強いに決まっているのだから幕府側に味方する」などの考えをもつだろう。授業者は、承久の乱で幕府方が勝利したことを伝え、朝廷に勝利を収める強大な力をもった武士の姿を印象づけた上で、粉河寺縁起絵巻を提示し初期の武士の姿と対比する。初期の武士が誕生してから100年程度で強い権力を握っていた朝廷を倒し幕府を開いたことにふれる。あえて武士の誕生から時系列で学ぶのではなく、承久の乱という鎌倉幕府の権力が確立する場面から扱うことで、子どもたちの興味を引き出し「**武士が権力を握ることができた決め手とは**」という問いを共有し調査へと進んでいきたい。この問いは一つの時代、一つの事象からでは答えにたどり着くことはできない。様々な視点や立場から歴史的特徴で分けた期間ごとの権力のあり方を考察したり、比較したりすることが必要である。この問いを共有することによって子どもたちは自然と期間を比較する必要性を感じ追求に臨んでいくだろう。

問いを共有したあと、子どもたちの発言を取り上げ

ながらどのような視点で、どのようなことを調査すれば答えにたどり着けそうかを共に考えたい。子どもたちの考えを尊重しつつも、調査のポイントになる「政治」「土地制度」については必ず視点として全体共有したい。視点や調査内容が定まったところで、武士政権が確立するまでを「武士誕生期」「平氏政権期」「鎌倉幕府成立期」と三つに区分し期間ごとに担当班を決め調査し、まとめを作成することを提案する。調査を進めた子どもたちは、以下のようなことを見いだすだろう。

「武士誕生期」

- ・最初は藤原氏など貴族が権力を握り、摂関政治を行っていたが上皇による院政が始まった。
- ・各地には貴族がもつ荘園があり、天皇よりも広大な土地をもっており、たくさんの税を得ていた。荘園には荘官がおり、中央にいる貴族の代わりに土地を治めていた。一方で口分田には天皇が派遣した国司がおり、争いが起きることもあった。
- ・地方の政治が乱れ、各地で反乱が起きたため武力をもった武士が活躍するようになり、力を伸ばした。荘園を支配する武士があらわれたり、有力な武士は武士団を組織したりして力をもっていった。

「平氏政権期」

- ・天皇や貴族の争いがきっかけで起こった保元・平治の乱で武士が活躍した。特に平氏は対立した源氏を打ち倒したことで大きな力を得た。
- ・政治を行うのは天皇や貴族だったが、平清盛は貴族の位である太政大臣となり、朝廷の中で力もち政治に参加するようになった。
- ・清盛は娘を天皇と結婚させ、その子を天皇にして

- ・ 朝廷との関係を深めた。
- ・ 平氏は西国に広大な荘園を手に入れた。

「鎌倉幕府成立期」

- ・ 壇ノ浦で平家を滅ぼし、続いて奥州藤原氏を滅ぼして東北地方も支配下におき、源氏が権力を握った。
- ・ 国ごとに守護を、荘園や公領に地頭を設置して土地を支配した。
- ・ 頼朝が征夷大将軍になり鎌倉幕府を開いた。武士による本格的な政治が始まった。
- ・ 頼朝は御家人と御恩と奉公の関係を結び、武士への支配を強めた。

子どもたちは互いに調べたことを発表し共有することで、平安時代から鎌倉時代の移り変わりを学んでいこう。そして、「**武士が権力を握ることができた決め手とは**」についてそれぞれの考えを語り合っていこう。「鎌倉幕府という組織ができて全国に影響をもったこと」「清盛の太政大臣を始め、平氏が政治に口をだせるようになったこと」「守護、地頭を置くことを朝廷に認めさせたこと」などの考えをもつだろう。語り合う中で「平氏は滅びているのだから権力をもったとは言えない」「鎌倉幕府が生まれたあとで承久の乱が起こっているから鎌倉幕府の成立では不十分だ」「守護、地頭と同時に国司、郡司、荘官などはまだいるから権

力を握ってはいない」などの意見が対立する場面が出てくるだろう。授業者は「最大の決め手はなにか」と問い直し議論を焦点化させる。その後「**この時代における権力とは何か**」という問いを提示する。子どもたちは「最大の決め手はなにか」を議論する中で、自分なりの根拠やこだわりをもち、語り合っていこう。一方で、一つの決め手に絞られなかったり、複数の要素が関連し合っていることに話が及んだりしていこう。子どもたちは、語り合いをする中で、この題材における本質に迫る言葉である「権力」という言葉を多く使っているはずである。広がったり、深まったりした子どもたちの思考をより深め、本質へとつなげるために「**この時代における権力とは何か**」を子どもたちと共有したい。

子どもたちは「政治の仕組みが整うことだ」「土地を支配する仕組みが確立することだ」「官位や地位を得ることだ」「武力だ。武力があったから武士は大きな力を得たし、武力がなければ政治の仕組みなどが正常に働かない」「どれか一つの要素ではなく複数の要素が入った状態が権力を握った状態だと思う」など思い思いに語っていこう。学んできた歴史的事象を根拠にしなが、事実を羅列するのではなく、自分なりの「権力観」を組み立てる姿を期待したい。

議論を終えた子どもたちが、権力とは何かについての意見をもち、平安時代から鎌倉時代への変化を様々な面からとらえそれぞれの時代を深く考察していることを願っている。

参考文献：黒田日出男ほか14名（2020）『社会科 中学生の歴史 日本の歩みと世界の動き』 株式会社帝国書院。
 関幸彦（2013）『武士の誕生』 株式会社講談社。
 松田陽三（2018）『日本史の論点』 中央公論新社。

題材における子どもの思考

承久の乱～あなたなら朝廷側、幕府側のどちらに味方するか～

- 「あなたなら朝廷側、幕府側のどちらに味方するか」を問うことで、承久の乱を通じて当時の時代に子どもの意識を向け、子どもたちのもつ鎌倉時代のイメージを共有し、広げる。
「立場は誰で考えればいいのか？御家人、その他の武士」「武力が強い武士に決まっている」
「朝廷の権力は強いはずだ。征夷大將軍だって朝廷から与えられたものだ」
- 承久の乱は幕府方の勝利で終わったことを伝え、朝廷に勝利を収める強大な力をもった武士の姿を印象づけた上で、粉河寺縁起絵巻を提示し初期の武士の姿と対比し興味を喚起し、「**武士が権力を握ることができた決め手とは**」という問いを共有する。



武士が権力を握ることができた決め手とは～調査しまとめよう～

- 前回の板書を確認し、疑問や予想を交えながらどんな「視点」「立場」から調査すれば問いを追求できそうか話し合う。
「武士があらわれたのはいつなのだろう」「朝廷の権力が弱まったのはいつ」「朝廷と武士の関係は」「政治の移り変わりが気になる」「平氏が力をもった時代がある。平氏と源氏は何か違ったのか」
- 子どもたちとの話し合いを基にしながら調査の参考にする視点として「政治」「土地制度」を共有し、「武士誕生期」「平氏政権期」「鎌倉幕府成立期」に時期を分けて班ごとに調査し、まとめることを確認する。

「武士誕生期」

- 政治＝天皇＋貴族
藤原氏が摂関政治をしていた。
↓
藤原氏の力をなくし天皇が政治をする院政が始まった。
- 土地制度＝公地公民が崩れ、貴族や地方の役人は土地を開墾し、荘園を多くもつことで力を伸ばそうとした。
- 貴族や地方の役人が好き勝手に世の中が荒れていた。
- 地方では、反乱や戦いが起こったため土地を守るため、戦いに勝つために武士が登場した。

「平氏政権期」

- 政治＝天皇＋平氏
平清盛が太政大臣になり、朝廷の上級官位を平氏が占めた。天皇家と血のつながりをもった。貴族のマネをして権力を握った。
- 土地制度＝武士にも荘園の所有が認められ、平氏は西国に広大な荘園をもった。
- 保元・平治の乱で平氏が活躍し、天皇に認められた。同じ武士の源氏は平氏に負けてしまい力を失った。

「鎌倉幕府成立期」

- 政治＝朝廷と幕府
源頼朝が征夷大將軍になり、鎌倉幕府を開いた。六波羅探題を置き、西国武士と朝廷を監視した。
- 土地制度＝全国に守護、地頭を置き、全国の荘園、公領を支配した。(朝廷の国司や荘官も支配する)
- 源平合戦で平氏を倒し、源氏が武士のトップになった。朝廷には頼らず、武士で政治を進めようとした。朝廷や天皇は不満をためていった。



武士が権力を握ることができた決め手とは～語り合おう～

- それぞれの班のまとめを聞いて自分なりの考えを構築し、全体で語り合う。
「武士で考えれば平清盛が太政大臣になったこと。太政大臣になったことで政治に参加しだした」「けれど平氏は源氏に敗れている。源頼朝が征夷大將軍になったことだろう」「朝廷から官位をもらうことが権力を握ることなのか。強いのは武士なのに与えるのが朝廷はおかしくないか」「武士が武士団を形成して武力で力を伸ばしたことだろう。この時代は力がすべてだ」「土地を支配した人が強いと思う。全国に守護、地頭を置いたことが大きい」「鎌倉幕府が全国を支配し始めたのに承久の乱が起きている。まだ権力は握れていない。承久の乱に勝ったことではないか」